

江戸時代前期における少年保護について

著者	丸目 透
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	10
ページ	132-136
発行年	1957-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/11161

江戸時代前期における少年保護について

丸 目 透

は し が き

敗戦後の混乱した社会が、多くの問題を生んだ中で、少年保護の問題は重要な社会の関心事となってきた。矯正教育の分野でも、大正十一年、「愛の法律」と称えられて発足した「少年法」「矯正院法」も、新しい法の理念によって、昭和二十三年に新「少年法」「少年院法」と脱皮した。然し我が古来の少年保護については、知られる所が少ない。旧「少年法」制定時の、「少年法案」「矯正院法案理由書」⁽¹⁾も、諸外国にならって、設けるものであるとし、我が古来の少年保護については少しもふれていない。日本の少年保護史としての江戸時代は、僅かに後期の「公事方御定書」の幼少者刑法の分野を以て、代表した形で説かれているに過ぎない。⁽²⁾特に江戸時代前期については、顧みられる事が少ない。

一 江戸幕府法における少年保護 慶長五年から桜田天皇の寛保二年迄の一四二年間の江戸時代前期で、幕府は初期における少年犯罪については、分国法の「今川仮名目録」の制度を踏襲している。明暦元年十月十三日(御当宗家令第二六六号)「江戸町中定。」一、童子之口論不_レ及_二沙汰_一、雙方父母可_レ加_二制詞_一之処、却而互

令_二荷担_一者、可_レ為_二曲事_一事。

一、童子誤而殺_二害朋友等_一、不_レ可_レ及_二死罪_一、但十三歳以上輩者不_レ可_レ逼_二其難_一事。

近世前期の分国法においては、十五才を以て限界とするのが普通であったのに、十三才という年令をとったのは疑問の存する事である。これは「江戸町中定」であるが広く用いられたと思料される。幕府の幼少年刑法としては、前期の終りに放火罪について定められた。

享保八卯年七月三日。(御用覚書抜)〔日記集要集一〕

一、附火いたし候のもの、十五才より内へ遠島、十六才以上へ可_レ為_二火罪候旨相極候間、向後其趣可_レ被_二心得候_一。卯七月。

この法令で、放火罪では十五才を限界として、火罪と遠島に区別されている。遠島は死刑に次ぐ重刑であるが、幼少者の死刑を避けようとする思想と、犯罪者懲罰の為の隔離の考えとを合わせて遠島が用いられたものと推察する事が出来る。これらの二法令によって、江戸時代前期では、殺人と放火について幼少者の特別処置法を有したのである。

幕府法は、慣習法を主とし、達や御触書によった。江戸時代前

期を内容とする。「御触書寛保集成」では、少年保護関係は少ない。僅かに「捨子の部」で元祿、宝永、享保と年代が下るにつれて、「捨子禁止」は、より具体的な防止策を示している。「異説の部」では十才未満の女児、男児の殺害事件にふれ、「雑の部」では、享保十一年の芝刈河岸の迷子札設置があるが、後期の宝暦、天明天保の各御触書集成に比較すると問題にならない程「少年保護関係」は少ない。唯、捨子対策において次第に積極的具体策が生れた事や、消極的保護面乍ら、幼少者殺害人追求等から、後期の幼少刑法を中心とする少年保護への芽生を感じる事が出来る。

具体的事実の記録として、比較的年令の明記してある江戸時代前期の刑事判決録「御仕置裁許帳」によると、1本人が幼少者であつても事件当事者の場合は、死罪、獄門等の重刑に処せられた。之は戦国時代の苛酷残忍な刑罰の残滓が、かなり存した事を示している。2「幼少成ル故」特別に処置された例、(1)元禄三年午九月十四日(2)判決に「幼少ナル故」という語句が使われ、特に寛大な処分を受けている。例(2)では、時の老中、阿部豊後守の指令によつて、流罪を仰付られた六才の幼少者に対して、「十五才迄親類預」としているこの裁決は後の「公事方御定書」七十九、「十五才以下之者昔御仕置の事」第一、二の条文の立法に大きな影響を与えた前例となつた。当時の幕府要職者の間に、幼少者保護の思想が存した事が伺われ、又、公儀として、非行傾向の強い少年に対し補導する何等かの準備があつたと思われる判例もある。

消極的保護面で、幼小者に危害を加えた者に対する処分では、親又は師匠等が、所謂「仕付」と称する折鑑を行った場合には、たとえ相当にひどい仕打で少年が死に至つた場合でも、非常に軽

く処分されるが、(7)他の場合特に金銭と関係があつて、幼少者を殺害した場合や虐待と認められる場合は、例外なく重刑に処せられている。諸判例によつて、幼少不具者↓幼少女児↓幼少男児と寛刑の範囲が拡大され、より積極的な幼少者保護規定が生れる基礎が培われつゝあつた事が推測される。

「御仕置裁許帳」で特に注意を引く事は、「少年関係」については、綱吉治政下の裁許帳の感ずらある。前記の「幼少成ル故」の名目で寛刑を受けたのもその治政下である。之は綱吉自身が特に牢圄の中まで心を用い、獄舎の改造や囚人の待遇改善等を行つた行刑への関心が影響したのか、又晩年には極端に走つた、「生類憐愍令」が一般に影響したのか、兎に角、綱吉治政下は少年保護の興隆した一時期をなしている。封建制度隆盛のこの前期に、分国法に始つたが、少年保護の思想を初めの判決に盛込んだ幕府要職者、更にその判決を拡張解釈して「公事方御定書」を生みだす迄に、大きく努力が注がれている事を見落してはならない。

二、藩法における少年保護 封与された各自の領内においては、

「自分仕置」の認められた各藩であつたが、実際には武家諸法度の、一、万事如江戸之法度⁽⁹⁾於三國々所々⁽¹⁰⁾、可遵行⁽¹¹⁾事、によつて幕府法に準じた様である。元禄十年六月に万石以上に令した、「流罪者を封内⁽¹²⁾に島のない場合に永牢等にする件」が、後期の文化六年(一八〇九)に編纂された「盛岡藩文化律」百十三、御仕置仕方之事では、「一、永籠右者領内嶋無之ハ遠島之罪、永牢或は親類縁者江吃度預置旨。元禄十丑年六月従」とあり、同藩では一二年間実施し且それを成文化している。又幕府も各藩に

法令を流すこともあった。⁽¹³⁾江戸時代前期に藩法として制定されたものは極めて少く大部分が後期に制定されている。藩における「行政及び司法の政令集」としての、「松江藩出雲国令」⁽¹⁴⁾（寛永十六年より特に江戸時代前期を主とする）では少年保護関係としてみられるものはない。又前期の「盛岡藩文化律」も古くは承応に遡る判例を例記しているが、少年関係についてはない。数少い藩法の中で、「土佐国地方史料」⁽¹⁵⁾（近世村落自治史料第二輯）の近世初期（山内時代）史料では詳細な法度、掟の中に、年令を明記した少年関係を見る事が出来る。即ち諸法度条々では男女童として表示している。中でも百姓に関するものが最も多く、（一）百姓の下人男女童等はしりこみの事。に關係ある条で処分の条にだけ童と表示していないが、耳や鼻をそぐといった刑罰から童が除外されたかについては不明である。

同藩では幼少年令については、武家は十一才⁽¹⁶⁾庶民では十五才としているが、庶民には種々な区分が行われている。幼少時、人につかわした子を取戻すことの条には、「七才を限り」という規定があり、別の条では、「七才を限り幼少の童は母の心に可任也」とあり、「百姓未進引受夫婦つれて走事」では「男子たりとも五才をかぎる幼少の子を引はなす事不可有之。六才已上の男子は先給人可存事」⁽¹⁷⁾とあり、先条の七才より一才低く規定した理由があげてある。之等は慶長十七年閏十月二十二日山内忠義の時法度であるが、幼年者に留意している事が伺われる。又幼少で徒弟となった者を後で下人として使う事を禁じた条もある。職業教育に従事する事を規定した条では、漁村では十六才からを一人前とし、十二、三才より十五才迄の作業をきめ、更に男子八、九

才で習うべき事、又女子は十五、六才より女職をきめている。百姓の場合は、男子十六才よりを一人前としている。百姓の娘は、十才より十六、七才迄を器用に女子職にあたる事を極めている。特に注目されるのは、一般的教育として「一、百姓の子供男女共に八、九才にも成候はば、面々の事を仕習せ可申候」⁽²⁰⁾の条で貧富の差によらず少年の教育の可塑性を強調し、読書を習わせることを望んでいる事である。切支丹御制禁指書同地下指出張によると、十五才を限って宗門改を行っていた。宗門改の年令は七・八才とした場合が多く、当才、二才等という例もあるが、山内藩の十五才は、宗門改から幼年を除外していたといえる。年令区分について、同藩の郷土史料の中の「郷土由来の事」で戸令の「凡男女三才以下為黄、十六才以下数少……」⁽²¹⁾を掲げて、老壮に依って服役の異なる事を述べている。山内藩の諸規定の年令区分が、古く戸令の影響を受けていることは否めない。近世的封建制度確立の初期において、その経済的基盤となる農・漁村のあり方を規定し、単に司法関係でなく一般教育迄規定し、特に幼少者（男女共）の年令区分には考慮したあとが見え、独自の藩法を制定することの少なかった、江戸前期の中で、よく整備されたものであり、少年保護に関しても注目され且讃えらるべき藩法という事が出来る。

三、庶民法における少年保護 近世的封建制度を隆昌へ盛上げようとした前期の、非公開主義の幕府法や藩法を受けて、庶民の地域社会内で「少年」をどう取扱ったかは、一応法規的な面で見なければならぬ。一、五人組文書集にみえる少年保護「五人組法規集」によると、前期に制定された五人組規定は少く、一〇九例に過ぎず、少年保護に關係ある条文を持つものは、半数の五

五の五人組規定である。(慶長0)元和(1)寛永(0)正徳(4)享保(13)元文(7)寛保(10)宝永(4)元祿以降が主である。規定した内容の主なものも要求しているもの、(1)五人組構成の中に子供と明記し、遵法を子供にも要求しているもの、(二)例、三、捨子禁止、十六例(享保年間が半数をしめている)、三、切支丹宗門改に子供と明記したもの七例で、更に当才、男女二才以上と年令を規定したもの三例。四、急水等非常に際しての出動義務の年令規定。六例。すべて元祿以降で、いづれも十五才以上六〇才未満としていて、一人前の労働可能とみられる十五才が、明文として表われた事を示している。五、幼少者を介抱すべき事を規定したもの。七例で「親は子を慈愛し……幼少にて父母なきもの……此四門の類は尤も以てあわれむべき随一他」(元祿十年信濃國伊那郡高遠町五人組惣領前書)に代表されるように、特に寄迎ない幼少者に對して、憐愍を加える事を規定している。六、幼少百姓について規定したもの十七例。五人組文書で多くみられる事項で前期としても最も目につくもので、①幼少百姓の田畑等を成人する迄預る。②五人組や村で引立援助する。(三例)③田畑が荒れない様村中で助け合う事。(七例)④年貢取納や検見等に影響することを強調して田畑を荒さない様規定したもの(二例)(幼少百姓田畠不荒様若荒し置候は、一、佃檢見之節御咄味の上急度曲事に可仰付候御事。享保八檢見之節御咄味五人組惣領村)。幼少百姓については、幼少だから憐むという点より、貢納負担者の一員とみている場合が多い。⑤幼少者相應の働を要求したもの、(四例)男子は十才より、女児では十二、三才より他で働かせる事を規定しているが、四例中二例は、次男以下の場合で、農村の二、三男問題が条文として掲げる程に問題とな

り始めた。⁽⁶⁾火事に際して、子供の保護を特別に規定したものの二例あつて一つは特別班を編成して童子の難を救う事、他の例は火事で子供を焼かない様に規定している。^(寛文七年尾張國知多郡岡田村五人組帳) 幼少者の緊急避難は、当然な事項乍ら、実際に条文として掲げてゐるのは少ない。中には、火事の際妻子を構つて、時期を失する事をいましめた規定を持つものもある。⁽⁷⁾ 幼少無_レ弁ものである事を明示したもの。一、牛馬売買并可憐生類事。^(前略) 雖然幼年の子どもは何の弁も無之によりはかうさ類無沙汰有之もの也。常に愍大切にいたすべき事能おしえ龜末に仕間敷者也。^(元禄十年信濃國伊賀前那郡高遠町五人組帳) 禁止事項の多い五人組文書で「幼年無弁もの」としたのは注目すべきである。之に對して「幼少老人は草木の実葉根をたべ、雜穀を貯置せよ」^(元文三年美作國眞庭郡村人五人組帳) 労働価値から區別を受け幼少が食物について制約されたものである。数少い前期の五人組法規の少年保護關係は、後期に制定された五人組法規で、幼少者に対する憐愍や特別考慮されたものがかへつて存するといえる。地域社会内での幼少者に対する自然な社会感情を条文に反映する事が後期より容易であつたのであろう。原始時代に発生した習俗が、其後次第に發展し、特に我國では江戸時代「若者制度」は、公的な上部の影響を受けない点で注目されるが、⁽²³⁾「若者制度」によると、条目制定のほとんどが江戸時代後期に出来ていて前期として、「若者制度」について特に取上げる事は出来ない。

むすび

江戸時代の少年保護は、「公事方御定書」以降と関連してみなければならぬ。前期に限定する事は不自然であるが、紙面の都

合で前期だけとした。又「少年保護」の概念についても、ここでは広く「幼少者関係」として扱った。「少年保護」として取扱うには、各史料の夫々の事例の持つ背景を究明する必要があるが、本稿では全体の概観のみに終った。従来かえりみられる事の少なかった江戸時代前期にも、幕府法、審法ともに、近世的封建制度隆盛期にあつて、司法の分野だけに限定しても、幼少年保護を具体的に実現しようとした努力が払われているし、特に庶民法で、後期でみる事の少ない、地域社会での温かい幼少者保護の跡れを汲みとる事が出来る。

江戸時代の少年保護は、後期のみに注目され勝であるが、前期は分国法に始つて、後期の「公事方御定書」以降の少年保護を生みだす基盤を培った時期として、日本の少年保護を考える上に、決して等閑に付し得ない一時代を担っている。

註(1) 「少年保護制度参考書」所載

(2) 「少年保護論集」所載石井良助博士「我が古法に於ける少年保護」一四四頁。(昭和十九年) 以後の諸書に散見するのは、この説に拠るものが多い。

(3) 時代区分は、石井良助博士「日本法制史概説」に従う。即ち法制史の「近世中期・後期」が「江戸時代前期・後期」に相当する。

(4) 中田薫博士「徳川刑法の論評」

(5) ①「近世法制史料叢書」第一、一〇九

②「同書」一。一四頁、十六

(6) 「同書」第一。一六〇頁。元禄三年、菅人権兵衛の件、継父が妻とその母に類まれ継子を殺人未遂の判決に「継子之儀に候之ハ公儀之も訴

や。如何様にも可致を仕形不届。

(7) 「同書」第一。六六頁一六一。菅人喜兵衛の件。甥にて弟子十五才を斬殺し廻でしばり二階にあげ死に至る。牢舎一親類訴訟赦免

「同書」第一。一六二。菅人忠兵衛の件、養子十三才を朝から晩まで桶かぶせ折殺死。牢舎一五人組度々訴訟一赦免

(8) 「同書」第一。三五頁一六五。菅人孫兵衛の件。小坊主を切殺。老中之相親。江戸中引廻し。於品川死罪。獄門。

(9) 「同書」第一。一六三。菅人さわの件。四才の男子を預り下痢粗相した事で、火煮で叩き折殺死。死罪獄門。

(10) 「徳川実紀」第六篇「常憲院殿御実紀」附録下。

(11) 但し、土佐。薩摩。加賀。の様な大藩では地方的特異性を保持した。

(12) (14) 「近世藩法資料集成」第三卷。

(13) 「御触書寛保集成」捨子の部。享保十九年「捨子を貰ひ更に他にやる場合子供十才未満の処置」で「石の通町奉行所より相触候間万石以上以下共に可被通置候」

(15) 「近世村落自治史料第二」三一五頁

(16) 「同書」三三七頁。四一七頁。

(17) 「同書」三二三頁。

(18) 「同書」三三二頁。

(19) (20) 「同書」三四一頁。

(21) 「同書」四一五頁。

(22) 「穂積陳重。穂積重遠編「五人組法規集」正編・続編上下による。

(23) 大日本聯合青年団発行「若者制度の研究」有賀恭一「諏訪の若者仲間。」中山太郎「日本若者史」